

## ローマの休日

2022.6.20

私は、何度も繰り返して同じ映画を見たり、同じ本を読んだり、同じテレビドラマを見たりするタイプではない。だからといって、それがよいとは思ってはいない。世の中には、何度も繰り返し見たり読んだりしている人がたくさんいる。自分もそうなりたいとは思わないが、それだけ夢中になれる、没頭できることには一種の憧れをもつ。誰々のファンになる、何かのファンやサポーターになるなども同様である。

自分の人生は、オリエンテーリング的な生き方だなと思うことがある。どこかに行った、何かを見たことが重要であり、そこに特別な思いや感情はなかったりすることが多い。それでも、たまには繰り返し見るものがある。宮崎駿監督のアニメ作品である。ただし、自分から見るのではなく、テレビで放映されるから何となく見るという、主体性のない受け身的な姿勢である。

映画の場合は、テレビで放映されても、一度見たものは見ない。だが、唯一、繰り返して見ているものがある。それが、「ローマの休日」である。名作中の名作である。自分がローマにいたというのもあるが、それだけではない何か、この作品にはある。

白黒なのが、かえっていい味わいを出している。そして、何とんでもアン王女役のオードリー・ヘップバーンの存在であろう。この作品は、1953年公開である。彼女の愛らしさと美しさは、今でもまったく色あせることはない。

何度か見たわけなので、おおよそのストーリーは頭に入っている。だが、「こんな場面あったっけ」ということがよくある。何度か見ている、意外と覚えていない。これは、宮崎駿アニメでも同じである。

実は、本も同じである。一度読んだからといって、すべてを理解しているわけではない。繰り返し読んだほうがよい本もたくさんある。それはわかっているのだが、オリエンテーリング的な私には、それがなかなかできない。

そろそろスタイルを変えようかと思う。いいものはいいのである。それが映画だろうが、アニメだろうが、本だろうが、絵画作品だろうがである。名所旧跡も同じである。何度も訪れて、そのよさを満喫するような生き方にしていきたい。その度ごとの発見を楽しみたい。

ローマの「真実の口」が有名な観光スポットになったのは、「ローマの休日」の影響があるだろう。そこに行けば、必ずおそろおそろ手を入れたくなる。思わず、映画のシーンを再現したくなる。もともとは、マンホールのふたである。それもおもしろい。

これからは、オリエンテーリング的ではなく、いいものを何度も味わうようなローマの休日的な生き方をしていきたい。そんなことを何度目かの「ローマの休日」を見ながら考えた。